

ペーター・ビクセル

『木毛*』

訳 井上 朋子

さて今度は、主人はスライドを見せることにした。来客はそのことに同意したようだった。

「スライドは色付きで、いつ見ても素敵な思い出なの」と妻は言った。ソファの配置を変えている間、主人はカメラの長所を説明し、妻は夢中になって海について話した。それから彼がスクリーンを持ってきてボタンを押すと、黒い箱から回転しながらスクリーンが出てきた。そのときもう一度ばねのついたからくりが見えるように、スクリーンを押し戻してやりなおした。そして本を2, 3冊重ねて、プロジェクターの位置を調節した。次に延長コードが必要になったが、しばらくの間見つけることができなかった。そのあとに三股プラグを探した。

それから照明を切った。

そこにはいつも同じ写真が映っている。真っ青な空、綿のような雲、そしてさらにそこにはマドレーヌの写った数枚の写真。

マドレーヌは笑って、写真では自分が酷く写っていると言った。そのとき、後ろに写っているのがロマネスク様式で、手前に写っているのがゴシック様式であることに気が付くだろう。そしてスライドすべてにギリシア神殿が写っているかのように見える。上映のあとは照明がまぶしく感じるだろう。

実際、マドレーヌは酷く写っていた。

そのときはためらわずに目を閉じて、何かほかのこと、そうだ、テディベアのことを考えればいい。

テディベアのお腹を切り開いたときに、母親が「だめになってしまったね」と言った。

「中に何かあるんだ。」

「ただの木毛よ。」木毛はテディベアの中で詰め物として生まれるんだ。そしてその殺されたテディベアの中身はガラス製品を梱包するときに使われてしまうんだ――。

数年が経過して初めて、もしかすると今日でも、ガラス製品を扱う店に行くたびに、テディベアをだめにしてしまったことを思い出して後悔する。

今のテディベアは昔のよりずっと小さい。昔は大きくて黄色をしていて、詰め物の中を調べたくなるような何かがあった。

もうだめになってしまった。

雪だるまの中にも何か入っているにちがいない。決して見つからないだろうけれど。探そうとするとすぐ、雪だるまではなくなってしまう。

テディベアではなくなってしまったのと同じように。

ガラス製品の店に行くと、テディベアが懐かしく感じる。

犬よりもずっと純真な目をしているからだ。

「だめになってしまったね」と母親は言った。

今のテディベアには、木毛は詰め物として使われていない。じきにガラス製品ももっといいもので包まれるようになるだろう。

そうになったら誰もテディベアを解剖しなくなり、木毛をひっかけ回して、その温もりの中に指を入れることは誰もしなくなるだろう、誰も。

そして今もまだマドレーヌの写真が映っている。

* 木材を糸状に削ったもの。

訳 井上朋子

Peter Bichsel, “Holzwolle”, S. 27-29, in: ders., *Eigentlich möchte Frau Blum den Milchmann kennenlernen – 21 Geschichten*, Suhrkamp (st 2567) 1996